

# 感覚とは何か：生態学的現象学の観点から

村 田 純 一

## はじめに

日常生活のなかで馴染みの現象である火について考えてみよう。ガスコンロの火でも、焚火の火でも、ともかく馴染みの現象である火を知覚している場面を考えてみる。そのとき、ごく当たり前のことだが、わたしたちはその火をさまざまな仕方で知覚している。火が燃えているのを見て、その音を聞いて、暖かさを感じて、そしてにおいを嗅いでいる。さらには、やけどをする危険をおかせば、それに触れることさえできる。このように、まとまった火の知覚経験を感覚様相の違いに応じて区分してみると、それぞれの経験で、経験の仕方は感覚様相の違いに応じて異なっているが、その対象のほうは同じ火であることには変わりがない、ということができる。こうしてみると、わたしたちの知覚経験は、少なくとも二つの要因から成立しているということができるよう思われる。つまり、何を知覚しているのかを規定する役割をもつ要因と、その対象をどのように経験しているのかを規定する役割を持つ要因とに区別できるように思われる。前者は、「なにを（経験しているか）」を規定する認知要因と呼ぶことができるだろうし、後者は、「いかに（経験しているか）」を規定する感覚要因と呼ぶことができるだろう。

関心がおもに知覚経験の認知的機能に集中しているばあいには、知覚においてなにを知ることができるのかがもっぱら問題となり、「なにを」という側面に注意が集中するために、「いかに」という側面のもつ特徴は見逃されがちになる。そのため、感覚的側面は、認知過程へ材料を提供する役割をもつものとしてのみ解釈されてしまう。これが、伝統的な心理学や、そして場合によっては、哲学においてもしばしばみられてきた感覚についての典型的な考え方である。

認知的関心のもとでは、世界はもっぱらわたしたちが知識を獲得するために向かって行く対象というあり方のもとでとらえられる。しかしながら、世界は、わたしたちがそれに向かって知識を獲得すべき対象としてのあり方を示すだけではない。世界はそれと同時に、あるいは、それに先立って、そのなかでわたしたちが身体をもってつねにすでに位置を占めており、そのなかで生きている場というあり方をも示している。わたしたちは身体的存在として、世

界のなかにある多様な対象から影響をこうむり、それに基づいてさまざまに反応するように促されている。前者の側面を表すために、「世界へ向かう存在」という言葉を使うとすれば、後者の側面は「世界のなかの存在」あるいは「世界内存在」という言葉を使うことができるだろう。

世界に関する経験のなかで最も基礎的な次元を形成している知覚経験の場合も世界に関する二つの側面をもっており、経験の「いかに」を示す側面が「世界内存在」のあり方に対応しているということができる。この意味で、知覚経験の「いかに」という側面は、身体をもった「世界内存在」のあり方を示しているのであり、この点から考えるなら、この側面は、認知過程に材料を提供する役割には還元できない特徴をもっているということができる。感覚は、認知過程へ入力を提供する器官という役割には還元できないのであり、むしろ、身体をもって世界内存在する多様なあり方を構成する役割をもっているのである。

もしこのように考えることができるとすれば、視覚、聴覚、触覚など、感覚の多様性ということの意味されていることは、たんに、入力から中枢に至る経路とネットワークが複数あるということだけではなく、身体を通して世界内存在するあり方が多様であること、そしてまた、それらは多様でありながら相互に関連し合っているあり方を示すものと解釈できることになる。

本論文では、ここで取り上げた身体的な仕方での世界内存在を示すものとしての感覚、という感覚に関する見方に内実を与えることを試みる。まずは、感覚についてのまとまった考察を残している最初の哲学者であるアリストテレスの議論を出発点としながら、その議論を現代の知見を参照しながら検討し直すことを行う。その際、重要な手掛かりを与えてくれるのは、現象学的精神病理者のE・シュトラウスによる現象学的な感覚論であり、さらには、知覚心理学者のJ・J・ギブソンによる生態学的アプローチからの感覚論である。これらの見解を検討することによって、知覚経験の「いかに」の側面に含まれる多様な問題に光が当てられると同時に、現象学的見方と生態学的見方が結び付くことから得られる「生態学的現象学」と呼びうる見方の可能性と意義が明らかにされるはずである。

## I 感覚の多次元性

### 1 感覚のスペクトル

感覚に関してはしばしば五感という言い方がなされるが、はたしてわたしたち人間には、ちょうど五つの感覚が備わっているといってよいのだろうか。それとも、最近の科学者たちが指摘しているように、感覚の数を五つと見なすのは根拠のない偏見にすぎないのだろうか。いずれにしても、このようなことが問題になるということは、感覚とはその数を数えられる

ような仕方で区別できることが前提されているはずだが、はたして感覚はそうに明確に区別できるものなのだろうか。また、区別できるとしても、そもそも、それぞれの感覚を区別する規準は何なのだろうか。

哲学史のなかでこれらの問いを最初に取り上げて、興味深い議論を展開したのは、アリストテレスである。アリストテレスは『魂について』の第二卷第六章から始まる各章で、各感覚様相を、それぞれの感覚に固有な対象（感覚されうるもの）によって区別し、人間に固有な感覚を五つに分類した。視覚は、それに固有な対象、つまり、色によって定義され、聴覚は音によって、味覚は味によって定義される、といった具合である。

現代では、言語哲学の分野で著名なH・P・グライスが「感覚についてのいくつかの所見 (Some Remarks about the Senses)」(Grice 1962/2011)と題された論文によって、この議論を現代哲学のなかで再活性化させるきっかけを作った。グライスは、その論文のなかで、感覚様相を定義する規準として四つの要因を取り上げた。まずは、その最初の二つの規準を取り上げて考えてみよう。

第一の規準は、アリストテレスの考えにおおむね対応しているものである。グライスによると、「感覚は、それを介してわたしたちが意識することになるさまざまな〔対象のもつ〕性質 (feature) によって区別される」(Grice 1962/2011:85)。例えば、見ることは、対象を色と形と大きさをもつものとして知覚することとして規定され、聞くことは、対象を音の大きさ、高さ、音色をもつものとして知覚すること、などのように規定される。

しかしながらこの答えは直ちに欠陥のあることが明らかとなる。例えば、何かが熱そうであったり、なめらかそうであったりすることを、見ることによって、あるいは、感じることによってもとらえることができる。また、形や大きさの場合も同様である。このように、知覚対象としての性質のなかには、ひとつ以上の感覚によってとらえられるものがあるために、対象となる性質を示しただけでは、感覚のあり方を一義的に定義できるわけではない。そこで、共通にとらえられる性質を区分けして、たとえば、視覚によってとらえられる（視覚的）形と触覚によってとらえられる（触覚的）形といった具合に区別を導入すると、それぞれを視覚と触覚を定義するために用いることができるかもしれない。しかし、このようなやり方では、ある概念を定義するのに、その定義すべき概念を使ってしまうことになり定義が循環してしまい、うまくいかないことは明らかである。

たとえ、ここで、複数の感覚によってとらえられる性質を規準から排除して、それぞれの様相に固有な性質のみを用いて感覚を定義することを行ったとしても（これはアリストテレスの見方に近いと思われるが）、困難を回避することは容易ではない。音は、大きさ、高さ、音色によって構成されているといわれるが、こうした音の三特性にそれぞれ異なった感覚が

対応していると見なされずに、なぜそれらはまとまったひとつの感覚が対応する音の性質と見なされるのだろうか。換言すると、聴覚を三つの感覚の複合体と見なさずひとつの感覚と見なすのはなぜだろうか。触覚や味覚の場合には、さらに問題がはっきりする。触覚的経験においては、形だけではなく、圧力、重さ、温度、さらには痛みを感じとっている。また、食物を味わう場合、触覚、嗅覚などが味覚にとって不可欠な役割を演じている。こうした点を考慮するなら、触覚や味覚は複合感覚ないし多感覚的 (multisensory) といってもよいように思われる。しかし、もしそうだとすると、なぜ触覚や味覚はひとつの統一的な感覚と見なされるのだろうか。

このように考えてくると、グライスが提案している第二の規準の重要性が浮き上がってくる。

グライスがいうように、「ひょっとすると、二つの感覚、例えば、視覚と嗅覚は、見ることと嗅ぐことの経験に備わる特殊な内観的特徴によって区別される、という提案がなされるかもしれない」(Grice 1962/2011:85)。ここで取り上げられている規準は、現在では、経験に備わる現象的性質とかクオリアといった言葉で呼ばれ、意識をめぐる哲学の中心課題と見なされている。

しかしながら、この規準に関しても問題は再現する。というのも、この場合も、経験に備わる現象的性質について循環に陥らずに説明することが困難だからである。見ること、ないし見ているという「感じ」と嗅ぐこと、ないし嗅いでいるという「感じ」を、見られたものや嗅がれたものへの言及なしに区別することができるだろうか。経験の「透明性」を強調する論者が主張するように、経験の内的性質をとらえようとしても、そこで見出されるものは、経験に現れた対象のあり方であり、対象の性質と区別された内観的特徴を見出すことは容易ではない。他方で、もし現れている対象の性質と内観的特徴を独立してとらえることが可能だとすると、においを見たり、色を嗅いだりするといったことが不可能ではないことになってしまうだろう。もちろん、「バラの香りを見る」といった共感覚経験が存在する可能性をまったく無視することはできないが、グライスもいうように、「わたしたちがものの香りを見ることができないことはたんなる偶然的事実とは思われなければならない」(Grice 1962/2011:93)。すなわち、少なくとも通常の場合であれば、見られたり嗅いだりされたりする対象の性質とまったく独立に、見たり嗅いだりする経験に備わる現象的な特徴を特定することは困難のように思われる。つまり、第一の規準と第二の規準は独立しては意味をもちえないように思われる。感覚を特徴づけようとする、感覚されるものと感覚することという密接に関係した二つの要因を必要とするのである。グライスもこの点を認めており、「視覚的経験を記述するには、ものがどのように見えるかについて語らねばならないし、そのような記述は明ら

かにそれぞれの固有の性質を示すことばを用いなければならない」(Grice 1062/2011: 99)。こうして見ると、グライスのいう第一の規準と第二の規準は、独立の規準と見なすことはできないことになる。

以上の議論から、感覚の特徴づけに関してどのような教訓を引き出せるだろうか。

ひとつの重要な帰結は、本論の最初に挙げた知覚経験の特徴づけに関して、より詳しい説明が必要となる点である。先には、火に関する多様な知覚経験のあり方に対応して、知覚経験には、「なにを」と「いかに」という二つの側面を取り出すことができると指摘した。そのときには、あたかも二つの側面が抽象的にではあれ、分離可能であるかのような記述の仕方をした。しかし、知覚経験に即する限り、この二つの側面は、抽象的にではあれ分離しうるわけではないことに注意する必要がある。

たとえば、わたしたちが見ている火は視覚という感覚様相とは独立に規定しうるたんなる火ではなく、視覚的に現れている火であり、つまり、一定の視覚野にさまざまな色や形をもって現れている火である。わたしたちが触れる火も、触覚的に感じられている火であり、熱さや痛みをもって感じられる火であり、場合によっては、やけどをもたらすものである。したがって、これらの場合、見られた火と触れられた火はわたしたちの生活のなかでは非常に違った意味をもっており、それぞれに対するわたしたちの反応の仕方も大きく異なっている。少なくともこのような場合には、経験に即する限り、それらを簡単には「同じもの」ということはできず、むしろ、「違ったもの」というほうがふさわしいことになるだろう。少なくとも日常生活の場面における知覚経験では、「なにを」という側面と「いかに」という側面は、切り離しがたく結びついているという方がふさわしいのである。この点を明確に指摘したのは、現象学者のE・シュトラウスである。

E・ストラウスは、よく知られた著作『感覚の意味について (Vom Sinn der Sinne)』において、感覚をもっぱら認知の観点からとらえる伝統的見方を批判し、感覚を主体（自己）と世界とのあいだのコミュニケーションとして解釈する見方を提起した。シュトラウスによると、このコミュニケーションは、二つの主要要因によって性格づけることができる。シュトラウスのあげる二つの要因はおおむね本論文で述べてきた「なにを」と「いかに」という知覚経験の二つの側面に対応するものと考えられる。前者は、何らかの対象に向かうという意味での志向的要因と見なされ、後者は、対象から影響を被るという意味で「パトスの（受苦的）要因」(ein pathisches Moment)と特徴づけられる。シュトラウスによると、これら二つの要因が結びつく仕方によってそれぞれの感覚様相の特徴が規定されることになる (Strauss 1978: 394f.)。視覚の場合には、対象への方向性という志向的要因が顕著であり、触覚や痛みの感覚の場合には、対象からの影響を被るというパトスの性格が顕著である。こうした組み

合わせの違いによって、同じ対象が違った仕方で経験されるだけではなく、それら対象の意味や価値もまた大きく異なってくることになる。

たとえば、わたしたちの社会では、誰かを見て熟視することと誰かに触って感じることは本質的に異なった意味をもっている。これはちょうど、通りで不潔なものを見ることと、それに触りそれを味わうことが全く異なった意味をもっているのと同じようなものである。このような場合には、対象を「いかに」感覚的に経験するかの違いが、「なにを」経験するかという対象の意味や価値のあり方に大きな影響を与えている。このような多様な要因を含んだ個々の感覚様相のあいだの違いと連関をシュトラウスは感覚のスペクトルと呼んでいる。

ちょうど色彩のスペクトルが、色相に関してそれぞれ相互に還元不可能でありながら、類似性に関して相互に比較可能な仕方で並べられているように、個々の感覚様相は独立してその意味をもっているというより、感覚様相の間で、それぞれ相互に還元不可能でありながら、志向的要因とパトスの要因との組み合わせという点で比較可能な連関をもつようなあり方を示すのである。この意味で、個々の感覚様相のあり方は、何らかの唯一の規準によっては規定しきれない多次元性を示すということができる。

## 2 皮膚によって見ること

グライスは、以上で参照したおもに経験の次元に関わる二つの規準に加えて、物理的次元に関わる二つの規準についても触れている。物理的規準の第一のものは、知覚を成立させる外的な条件のひとつである刺激に関わるもので、第二の規準は、刺激を受け取る物理的かつ生理的な条件に関わるものであり、神経系や脳までも含んだ感覚器官に関わるものである。

これらの規準は、科学者にとってはオーソドックスなものと思われるが、グライスによると、先にあげた経験の現象的特徴を考慮に入れない限り、それらだけでは感覚を規定するには不十分だと見なされる。グライスは、この考えを示すために、思考実験によってひとつの空想的状況を想定している。

たとえば、火星人が現れたと想定する。その火星人は、二対の感覚器官をもっており、その感覚器官によって、光による刺激を受けて、色や形を認知していると考えられる。それらは人間の目によく似ているのであるが、ただし、彼ら／彼女らは一対の目ではなく、二対の「目」をもっているように見える。こうした状況の下で、火星人は、これらの感覚器官によって見ているということが出来るだろうか。もしここで火星人が、二対の感覚器官による対象の経験の仕方はまったく異なっている、と述べたとするとどうなるだろうか。二つの対のうち、どちらかの器官が視覚であり、どちらかはそうでないと区別をつけられるだろうか。

グライスは、このような思考実験によって、感覚の種類を特定するには、対象の性質と結



びついた経験の現象的特徴をとらえることが不可欠であり、経験に内在的な特徴が最も重要な規準であることを示そうとしている（Grice 1962/2011：94f.）。

しかし、感覚様相を特定することが困難な両義的な事例を考えるために、グライスが用いたような思考実験をもちだす必要はないだろう。現代では、いわゆる感覚代替システムと呼ばれる興味深い事例が知られている。もっとも有名なものは、「触覚による視覚代替システム（TVSS：tactile visual substitution system）」と呼ばれるものであり、この装置は、光刺激を検知するテレビカメラと、カメラから受け取った刺激を変換して、皮膚上におかれた格子に取り付けられた小さな針に振動を起こし、それによって対象についての情報を伝える装置からなるものである。

目の不自由な人は、テレビカメラを頭に、そして振動子をつけた格子を腹または背中に装着して、環境内を移動する訓練をすると、さまざまな対象を「見る」ことができるようになる。哲学者のデネットはTVSSによる経験を次のように描いている。「少し訓練しただけで、皮膚上の針に向けられた意識は消えてしまった。いわば、皮膚上の刺激の集まりである画素パッドは透明化した、といってもよいかもしれない。そして、被験者の視点は、カメラからの視点へと移動し、頭上からのものになったのである」（デネット 1998：403）。

この装置によって可能となる経験はしばしば「皮膚による視覚」と呼ばれる。しかし、なぜこの経験は視覚的であり、触覚的ではないといえるのだろうか。

TVSSを装備した被験者はカメラから光の刺激を受容する。しかし同時に、針の動きを通して触覚的刺激を受容している。どちらの刺激が決定的な役割を演じているかはたして、そして、どのようにして決められるだろうか。もし決められるとすれば、それは、被験者がなにを、そして、いかに経験しているかを確認できる場合のみだろう。TVSSはどのような感覚器官なのか、という問いに対する答えを得ようとする場合も、事情は同じだろう。TVSSは目なのか、皮膚なのか、それとも両方なのか。答えは被験者がなにをいかに経験しているかに依存している。

こうして前節で検討した見方を再確認することになる。つまり、感覚の種類を確定するためには、知覚者がなにをいかに経験しているのか、という経験のあり方の特定が不可欠なのである。しかしながら、ここでひとつの重要な点を付加する必要がある。

TVSSを装備した被験者の経験に関して、ここではそれは見ることの一種なのか、感じるものの一種なのか、そのどちらかに一義的に決定できることを前提して議論してきた。しかしはたしてこの前提は無条件に認められるのだろうか。というのも、TVSSによる対象の検知能力は通常の人々による対象の検知能力と完全に同じというわけではないように思われるからである。例えば、次のように主張する論者もいる。「しかし、感覚代替システムは盲人に

対する文字通りの治療をもたらすものではないことは明らかである。それらは、盲目である人々への補助手段にすぎない。そして、これは些細な問題ではない」(O'Dea 2011:299)。実際、たとえ被験者が遠方にある対象を比較的によく検知することができたとしても、そのことは被験者が通常の人が享受できるような経験と同じ経験を享受できることを意味するわけではない。TVSSによって世界を経験することがいかなることなのかは、その装置なしに世界を経験することのできるひとの場合と同じとはかぎらない。この意味で、TVSSを装備した被験者の経験を単純に「皮膚による視覚」と記述することができるかどうかには疑問が残るだろう。むしろ、TVSSの被験者の経験は、技術によって作られた新しい感覚様相のあり方を示すものといった方がよいかもしれない。こうして見ると、感覚様相を定義する規準として感覚器官をもちだす見方は文字通りには受け入れられないにしても、被験者に備わる感覚器官の特徴が、被験者の経験にとってまったく関係がないということを意味するわけではない点に注意すべきである。むしろ、感覚器官の特徴は、被験者が世界を経験する仕方を構成する上で大きな影響力をもっているのである。

こうして、感覚様相を定義する上では経験の次元が不可欠であるにしても、同時に他方では、物理的次元を無視することもできないということになる。

ただしここで指摘した物理的条件は、それらに適応し、それらを刺激という役割や感覚器官という役割として、知覚経験の連関に取り入れることができる場合の条件であり、知覚主体と無関係に特定できるようなものではない。

TVSSの事例が印象深く示しているように、主体が経験する仕方は主体がどのように外的、内的な物理的条件に適応し、それらをいわば身体化しているかに対応している。訓練を受ける前には、TVSSはたんなる触覚的刺激を皮膚に与える装置でしかない。訓練を受け、装置がいわば身体の延長と化すことによって、刺激の現れ方も変化し、感覚器官のあり方もまた変化するのである。したがって、こうした事態は以下のように記述してもよいように思われる。すなわち、世界がどのように現れ、わたしたちが世界をどのように経験しているのか、というそのあり方は、わたしたちが世界のなかにどのような仕方で物理的、身体的に内属しているかを「表現」している。つまり、感覚は身体的な世界内存在のあり方を「表現」しているということができるとはなかろうか。このような意味で、感覚を身体的世界内存在のあり方としてとらえる見方は、感覚が物理的世界のなかにどのように実現しているかを解明することを重要な課題のひとつとしているといえることになる。

これらの議論すべてが示しているのは、感覚を特徴づけるためには、グライスによって提起された四つの規準のひとつを選ぶ必要はないということである。ある主体がどの感覚を用いているのかを解明するためには、つまり、いかに世界を経験しているかを解明するために



は、むしろ、四つの規準すべてを必要とするのである。この意味で、マクファーソンによる以下の指摘は重要である。「哲学者たちはどの基準が重要かに関して議論し続けてきた。しかし、なぜそれらすべてが重要だと考えないのだろうか。それらすべての規準が実際重要であるし、それらすべての規準が、哲学的な問題と科学的な問題のどちらの問題解決にとっても重要なのである」(Macpherson 2011: 37)。換言すると、感覚は多次元的な仕方決定されているのである。

## II 感覚の生態学的要因としての媒質

### 1 アリストテレスの見解

アリストテレスの感覚論には、最初に取り上げた論点のほかにもうひとつ重要な論点が含まれている。アリストテレスは、感覚を定義するための規準として、対象の特有な性質を提起しただけではなく、そうした性質を知覚可能にするために必要な媒質の役割を強調した。

アリストテレスは自らに先行する論者たちの視覚理論を批判することによって、自らの視覚理論の特徴を明らかにしている。アリストテレスによると、エンペドクレス、原子論者、プラトンなどの先行する論者たちは、視覚の成立をさまざまな仕方論じているが、視覚の成立を、流体や運動する粒子などのような何らかの物理的要因を通して知覚者と知覚対象が接触することによって可能になるものと見なしている点では共通している。しかし、こうした見方のもとでは、視覚はまるで一種の触覚ということになってしまう。アリストテレスはこの接触モデルを批判し、それに代わる媒質モデルを提起するのである。

アリストテレスによると、知覚が実現するさいには、知覚者と知覚される対象とのあいだに「距離」を作るなんらかの媒質が介在する必要がある。というのも、「もし人が色をもつものを視覚器官自体の上に直接置いたなら、それが見られることはないだろう」(アリストテレス 2014: 419a12) からである。視覚の場合、この媒質の役割を演じるのは「透明なもの」である。透明なものは、可能状態である暗闇の状態から光によって変化して活動実現状態となり、視覚の固有対象である色と本質的な関係をもつことになる。色は、活動実現状態にある透明なものを動かすことによって見られることになるからであり、この理由によって、「色は光のない状況では見られることはないのである」(アリストテレス 2014: 418b)。

アリストテレスは、この媒質モデルを視覚以外の感覚様相にも拡張する。聴覚の場合には、媒質の役割を演じるのは弾性体としての空気や水であり、においの場合にも、空気や水などの透明なものに類似したものであり、といった具合である。これらのいわば遠感覚とは違って、触覚や味覚のような「接触」感覚の場合には、この媒質モデルを当てはめることは困難なように思われるかもしれない。にもかかわらず、こうした感覚に関しても同じ構造が見ら

れると考えている。味わうことを可能にするのは、湿ったものであり、触覚の場合には、肉すなわち身体そのものが媒質の役割を演じる。このような仕方では、それぞれの感覚様相には、特定の媒質が対応しており、それが固有の対象を知覚可能にすると見なされる。それにしてもなぜ知覚を実現するには媒質が必要なのだろうか。なぜ世界の知覚を可能にするには「距離」が必要なのだろうか。

その理由は、アリストテレスが繰り返し述べているように、感覚器官の上に直接置かれたものは知覚することができないからである。換言すると感覚器官がなんらかのものの自体によって直接刺激されると、なにも知覚できないからである。ここで前提となっているのは、どんなものも「形相」と「質料」からなるというアリストテレス特有の考え方であり、また、知覚が可能であるためには、ものの形相と質料とが分離され、形相のみが受け取られ、感覚器官自体がこの形相によって対象と同じ活動実現状態になる必要があるという考え方である。

植物の場合には、対象から形相とともに質料も一緒に受け取ってしまうため、対象から物理的に影響を受けることになり、なにも知覚することはできない。人間も含めた動物の場合には、対象の質料から切り離された形相のみを受け取って、それに対応した活動実現状態になることができる。アリストテレスは、質料から切り離された形相のみを受け取る能力を動物の基本特徴と見なしているということもできるだろう。

ギリシャ哲学の専門家のバーニエットは媒質の役割について以下のように述べている。「媒質の機能は、第一には、結合することより分離することにある。とりわけ、分離が必要とされるのは、対象の感覚可能な形相と質料とである。……視覚可能な形相は、それを色のある対象から切り離す働きをする媒質を通してのみ、目に現れることができるのだ」(Burnyeat 1995: 427)。触覚の場合には、動物も対象から一定程度、物理的な影響を被ることになる。しかし同時に動物の場合には、身体自体は感覚器官ではなく、媒質であるために、質料から切り離された触覚的形相を受け取ることができると見なされる。

このように、アリストテレスの知覚論では、媒質が決定的な役割を演じている。対象が知覚者に一定の仕方では現れるためには、適切な媒質が存在し、媒質が対象と知覚者、そして、対象とその形相とを分離することが必要なのである。以上のように見てくると、アリストテレスによって与えられた媒質の機能は、それぞれの感覚に固有なあり方を実現させ、それを通して世界が知覚者に特有な仕方では現れることをもたらすことにあるのだから、その機能は「現象学的」機能と呼ぶこともできるだろう。

ひょっとするとこのような知覚構造の記述の仕方は、形相と質料、可能状態と活動実現状態といったアリストテレス固有の概念装置を用いたもので、時代遅れで、非科学的なもののように思われるかもしれない。しかし、必ずしもそのように考える必要はないことを示した

めに、次に、この見方の現代における後継者と見なしうような知覚に関する現代版の理論を参照することにしたい。

## 2 ギブソンの見方

現代の知覚論において媒質の重要な役割を強調しているのは、J・J・ギブソンである。ギブソンは、知覚論を展開するに当たり、動物や人間が生きている環境の構造を記述することからはじめている。ギブソンによると、動物や人間の生活している環境は、古典的な物理学が描くような世界、つまり、空虚な空間のなかにさまざまな対象が位置を占めているような世界ではない。そのような世界とは違って、地上の環境を構成しているのは、媒質 (medium)、物質 (substance)、そして両者を区分けしている面 (surface) である (ギブソン 1985 : 17)。

地球上で最も基本的な物質は大地であり、最も基本的な媒質は空気と水である。大地と空気とのあいだの境界面を形成するのは、陸生動物にとって最も重要な表面であり、それは地面 (ground) であり、「それは文字通り、そして比喩的にも陸生動物の知覚や行動の基盤 (ground) である。すなわち地面は動物にとっての支持面である」(ギブソン 1985 : 17)。

液体と気体からなる媒質の一般的な性格は、透明性である。媒質は光を透過させるのに対して、固体は一般に光を吸収したり反射したりすることによって不透明である。しかし、媒質に関して最も重要なのは、そのなかで光は伝達されるだけでなく、四方から反射され、一定の構造化された光の領域を形成する点である。つまり、照明 (illumination) と呼ばれる現象を形成する点である。「照明は、媒質内のどの点をとってみてもそこには包囲光 (ambient light) があり、したがってあらゆる方向からその点に集まる光があるという意味で、媒質を「満たして」いる」(ギブソン 1985 : 18)。

ギブソンによると、包囲光は、放射光から厳密に区別されねばならない。というのも、包囲光は、媒質内に位置を占める対象に関する情報を含んでいるからである。そして、この情報が、環境を見ることを可能にするのである (この包囲光はアリストテレスの言葉を使うと、光によって活動実現状態になった透明なものの状態に対応するということが不可能ではないだろう)。視覚に対するこの機能のほかに、媒質は物理的出来事から発せられた振動ないし圧縮波を伝達し、音を聞き、振動現象に耳を傾けることを可能にする。媒質はまた、化学的物質を素早く拡散させ、においを嗅ぐことを可能にする。

このように、媒質のおもな機能は情報を用意し知覚を可能にする点にある。このように考えることができるとすると、知覚は刺激を受け取ることから始まるのではなく、媒質内の情報をピックアップ (pick up) することによって成立するのであり、したがって、感覚様相を

特徴づける（物理的）規準として考えられるのは、刺激ではなく、媒質内の情報のあり方ということになる。そして、後に詳しく見ていくが、感覚器官という概念もまた、違った仕方で理解されることになる。なぜなら、刺激を受け取るだけの感覚器官という考え方が入る余地はなく、身体活動を通して情報を能動的に探索することが知覚の基本である以上、探索活動を行う身体システム全体が感覚器官と見なされねばならないからである。このような考え方が、知覚システムとしての感覚というギブソンの感覚観を形成することになる。以上のような意味で、媒質は、ギブソンの感覚論の中心的位置を占めることになる。

さらに、媒質はまたもうひとつの重要な役割をもっている。媒質は、固体とは違って動物の運動を妨害するのではなく、むしろそれを支援することによって、動物の多様な運動を可能にする役割をもっている。媒質のこの特徴は、最初の機能と密接な関係をもっている。というのも、知覚は、媒質内の情報をピックアップする働きを行うのであるが、その働きは、たんなる静的な状態として実現するのではなく、多様な運動を介して実現されるものだからである。すなわち、知覚は、ギブソンの言葉を使うと「探索的行為（exploratory action）」として実現するものであるから、媒質は、知覚に情報を提供するとともに、そのなかで行為としての知覚を可能にするという役割も果たしているのである。

「要約すれば、環境媒質の特性は呼吸を可能にし、運動することができ、見ることができるように照明で満たすことができ、また振動や拡散する発散物質を検知することを可能にしている。さらに、それは均質であり、上-下という絶対的關係軸を有する。こうした自然が提供するもの、またこれらの可能性ないしは機会のすべて、わたしはそれらをアフォーダンス（affordance）と名づけたいと思うが、それは不変的なものである。これらの諸特性は動物の進化の歴史を通してまったく変わることなく保たれている。」（ギブソン 1985：19f.）

以上のようなギブソンが示唆していることをすべて考慮に入れるならば、なぜギブソンは知覚の理論においてアリストテレスの後継者と見なしうるのかは明らかだと思われる。媒質は、知覚を可能にする情報ないし「形相」が実現する場所である。知覚は情報のピックアップによって、ないし、対象の「形相」と共鳴することによって成立するのである（以上の論点に関しては、さらに村田（2013）を参照）。

ギブソンは、以上のような見方に基づいて、知覚の古典的理論を一貫して批判し続けた。古典的な理論によると、知覚は感覚に基づいて成立すると前提され、感覚という概念はもっぱら異なった種類の（主観的な）感覚作用に対応して分類されることになる。この見方によ

ると、感覚に関する重要な研究課題は、主観的な感覚作用の目録をできるだけ完璧なものにすることにおかれる。しかし、これまでさまざまな試みがなされてきたが、はっきりした成果が得られたことはまったくない。この考え方に基づいて、研究者たちは、さまざまな仕方  
で感覚経験を知覚経験から分離しようとした。たとえば、触感覚の研究では、「被験者に受動的であることを要求し、刺激は、被験者が獲得するのではなく、実験者が押しつけた。……被験者は、皮膚が押されたことの意識について報告するように教示され、その対象が何であるかについての報告は求められなかった」（ギブソン 2011：115）。

以上のような見方とは違って、ギブソンの見方においては、これまでとは反対の方法が要求される。被験者は受動的ではなく、能動的に対象を探索するようにと要求され、内観的に何を意識したかではなく、なにを知覚したのかを報告することが奨励される。こうして、感覚は意識状態の多様な形式と見なされるのではなく、媒質から多様な仕方  
で情報をピックアップする知覚システムと見なされることになる。そして知覚システムは、媒質のなかからピックアップされる情報の種類に応じて分類されることになる。

もし感覚概念をこのような仕方  
で解釈することができるなら、わたしたちが日常的に理解している感覚についての自然な見方に対して一定の論拠を与えることができる。

たとえば、わたしたちは日常的には、人間以外の動物の感覚器官が人間と非常に違っていたとしても、その働き方についてまったく理解できないものとは考えないことが多い。あるいは、理解できると見なす傾向をもっているように思われる。なぜだろうか。

ギブソンは先の引用で、地球の基本的な構造、とりわけ媒質構造が「動物の進化の歴史を通してまったく変わることなく保たれている」と述べていた。もしこのように考えることができるとするなら、動物の知覚システムは環境構造に適応することによって進化してきた以上、動物の感覚は、進化の歴史をまったく異にするであろう火星人の場合ほどには、人間とは違っていないと考えることはごく自然なことだということになるだろう。

さらには、なぜわたしたちは、感覚の数を五つと見なすことを、それを証明することに長らく失敗してきたにもかかわらず保持し続けてきたのかという疑問に関しても、一定の答えを提出することが可能になるだろう。ギブソンは以下のように述べている。

「この〔感覚の〕目録づくりの試みは、失敗したといってよいだろう。すべてを網羅した目録はひとつもない。外受容感覚の五つの様相にある感覚作用の質は、報告困難なほど曖昧になり、五つの様相の存在も怪しくなった。今日、承認された様相のリストは存在しない。教科書に書かれた感覚の数も、六から一二、またはそれ以上などと一致しない。にもかかわらず、感覚が五つあるという素朴な信念に見切りをつけられないのは、



別の理由があるからである。外部への注意にはおなじみの五つの様式があるのである。」  
(ギブソン 2011: 57)

外部への注意の五つの様式という概念のもとでギブソンが考えているのは、身体の知覚装置を方向づけるための五つの主要な方法である。すなわち、聞く、触る、嗅ぐ、味わう、見るという方法である。これらは、「耳－頭部システム」、「手－身体システム」、「鼻－頭部システム」、「口－頭部システム」、「眼－頭部システム」の調節と探索的な運動によって実現する(ギブソン 2011: 50)。ギブソンは次のように述べている。「このような調節が、注意の様式を構成する。……これは、心理学者ではなく、一般の人々が用いる意味での感覚である」(ギブソン 2011: 68)。

ただし、ギブソンは、特に食物摂取の場合には、嗅ぐことと味わうことという二つの注意の様式が実現しており、味わうためには口と鼻は不可分な仕方では機能すると考えている。

さらには、ギブソンは、基礎定位システム(basic orienting system)を重要で最も基礎的な知覚システムと見なしており、このシステムによって、重力や外部からの力を検知して、身体的平衡状態を実現している。この意味で、外部への注意の様式に基づくギブソンによる感覚に関する分類は、必ずしも五感という言葉で一般に理解されている内容と完全に重なるわけではないが、おおむね対応しているといえるだろう。

ギブソンも指摘しているように、今日では、五感という素朴な見方はさまざまな科学的知見に基づいて批判されている。今日では、動物は人間の仕方とは非常に違った仕方で対象を検知する仕方を備えていることがよく知られるようになっている。コウモリによる音波による反響定位法やミツバチによる紫外線の検知など多様なものが知られている。さらには、TVSSをはじめさまざまな人工的な感覚補助装置が知られている。伝統的心理学者のティチナーは、食事中にわたし達は「本当は嗅覚に属するものを味覚に帰属させる」という間違いを犯し続けている、と述べている(ギブソン 2011: 157)。もし感覚器官によって感覚様相が定義できると見なすような前節で検討した考え方を採用するなら、ティチナーのような「科学的」主張も可能かもしれない。しかし、感覚をギブソンが行ったように知覚システムと見なすのであれば、状況は違ってくるはずである。

ギブソンは、口のもつ生理学的構造の複雑さと「口－頭部システム」の運動によってピックアップされる情報の複雑さを強調し、以下のように述べている。「味覚の情報獲得は、明らかに多重である。しかし、その多重な情報のすべてが同一の物質を特定し、入力は同時的に生起する。これは、受容器が、口の活動で共変する構造になっているからである。口の活動は、食物を飲み込む準備をするだけではない。噛むことで液体と芳香が解き放たれ、舌の運

動で、液体と芳香が化学的受容領域に運ばれる。それは探索的で、刺激を生産する活動である。味覚は注意の一種であり、口はそこに含まれるものに焦点を当てている」(ギブソン 2011: 60f.)。

もしわたしたちの日常生活の基本的要因である食べるという統一的過程に注目するなら、味覚を一つの感覚と見なすことは自然だろう。たとえ、味覚には、嗅覚、触覚、視覚、聴覚などが含まれているにしてもである。ギブソンが述べているように、「知覚は、柔軟で、便宜的で、多重で、冗長なのである」(ギブソン 2011: 176)。もしわたしたちが感覚の多次元性というこの性格を受け入れるのであれば、わたしたちは食事中つねに間違っているという必要はないのである。むしろ、ティチナーの主張の方が、具体的経験のあり方から抽象された場合を基本と見なしているという点で、「(抽象的な要因を) 具体的なものと取り違えてしまう誤謬 (the fallacy of misplaced concreteness)」を犯しているといわねばならないだろう。五感という言葉に示された素朴な感覚観は、科学者の間では評判は悪いかもかもしれないが、感覚に関する多次元性を基本とする生態学的な感覚観を認めるのであれば、擁護することも不可能ではないのである。

ここまで、アリストテレスの見解に対してギブソンによる見方がどのような寄与をもたらしていると考えられるかに関して見てきたが、最後にもうひとつ論点を付け加えておきたい。それは、感覚と身体運動の本質的關係に焦点を当てることによって、感覚論をより整合的なものにすることができるという論点である。

ギブソンが強調しているように、知覚はつねに多様な身体運動によって成立する。とりわけ触覚の場合、この性格が顕著である。触覚的経験によって対象についての情報を獲得しようとする場合、身体を動かすこと、とりわけ手を動かすことが必要である。もしわたしたちが身体を能動的に動かすことがなければ、そして身体がもっぱら何かから受動的に触れられるだけであるとすれば、対象のあり方をとらえることは難しい。特に対象が動かなければなおさらである。こうした事情は、たとえ「接触」感覚のような場合でさえ、そのなかで身体運動が可能となる媒質が必要だということを示唆している。運動が可能になることによって、対象が知覚者に現れるための「距離」が形成されるのである。もしこのように考えることができるとするなら、触覚の場合に媒質として働くのは、アリストテレスが述べているように、肉ないし身体であるにしても、それのみではなく、身体をそのなかで動かすことができる媒質もまたそこに含まれているということになる。味わう場合も例外ではない。「口-頭部システム」の運動の可能性がなければ、味覚的経験は不可能である。この意味で、知覚を可能にする生態学的要因としての媒質は、すべての感覚様相にとっての媒質の役割をもっていると考えられるだろう。

### Ⅲ 生態学的現象学の観点から

本論ではここまで、感覚の意味を解明するために、E・シュトラウスの現象学的アプローチとJ・J・ギブソンの生態学的アプローチを取り上げてきたが、そのさい、両者の相違について触れることはなかった。ひょっとすると、読者のなかには、はたしてこの二つのアプローチは両立可能なのかに関して疑問を抱かれた方もおられるかもしれない。とりわけ、ギブソンが情報の検知としての知覚と主観的感じ方としての感覚作用（sensation）とを峻別している点を考えると、このような疑念をもたれることも、もっともだといえる。

実際ギブソンは、しばしば、知覚はいかなる感覚作用なしにも成立可能であることを示唆している。知覚は入力刺激の感覚の性質についての意識なしに可能であるという意味で、「感覚作用なしの知覚（sensationless perception）」（ギブソン 2011：2）という言葉を使うことさえある。このように見えてくると、ギブソンは知覚の「なにを」という側面に焦点を合わせ「いかに」の側面を無視しているのではないか、と思われても不思議ではない。しかしながら、ギブソンは「いかに」の側面について触れなかったわけではなく、たとえその試みは必ずしもつねに明快であり成功しているとはいえないことはあるにしても、自らのアプローチのなかで「いかに」の側面を明らかにしようと試みていると解釈することができるように思われる。そのことを示すためにも、知覚経験の「いかに」の側面を集中的に取り上げてきた現象学的見方が生態学的見方にとって必ずしも疎遠なものではないことを示す必要がある。以下では、二つの論点に絞って、現象学的観点と生態学的観点が疎遠であるどころか、両立可能であり、また、結合可能であることを示すことを試みる。そのうえで、両者の結合した見方、すなわち生態学的現象学の観点から明らかになる感覚の多次元性のあり方をさらに明らかにすることにしたい。

#### 1 痛みを伴った接触

最初の主題は、痛みの体験である。

ギブソンは、一方では、痛みは対象の危険性を意識化するうえで有用なものであることを認めて、次のように述べている。「世界との新しい接触が安全かどうかを発見するためにはある程度の痛みを被ることが唯一の方法となる。このようにすることだけが対象の危険性を評価し、対象を扱う際にどこまで安全なのかの決定をもたらす。したがって、痛みを伴う接触は、獲得可能な環境の刺激情報の一種である」（ギブソン 2011：152）。

ギブソンはこのように、生きるために痛みが不可欠の役割を果たしていることを認めているにもかかわらず、他方では、痛みが世界との（知覚的）関係をもつことを否定する。

「これらすべての場合において、痛みの感覚作用は、負傷を回避するための指令を出すので、生物学的に有用であることには何の疑いもないが、それでも、これは知覚ではない。痛みの感覚作用は、世界についての情報をまったく運ばず、観察者の身体についての情報のみを伝えて知覚に干渉する。」（ギブソン 2011：352）

ギブソンは、痛みが対象の価値評価を含み、回避行動を喚起する機能をもっていることを認めている。にもかかわらず、ギブソンは、痛みは観察者の身体のみに関係し、世界との知覚的關係からは切り離されたものと考えている。

しかし、なんらかのものに痛みを伴って触れているとき、その経験を二つに分けて、世界に関係する触覚的認知と世界との関係から切り離された主観的感じとしての痛みとに分離することができるだろうか。

もちろん、なんらかの対象の性質を触覚によって経験する場合と、対象に触ることから引き起こされる痛みの経験とのあいだには大きな違いがあるだろう。後者の痛みの経験の場合には、対象は危険なものとして現れ、回避行動を喚起する。したがって、注意は対象のみに向かっているわけではなく、身体の傷ついた箇所にも向かっている。そのために、注意は分裂し、対象へ向かう方向からは逸らされるため、対象の認知過程は妨害される。この意味で、対象との知覚關係のあり方は、根本的に変更を受ける。しかし、こうして生じる変更された世界との關係も、世界との身体的關係のなかに巻き込まれているあり方のひとつにほかならない（さらに詳しくは、村田 2015 100ff. を参照）。

シュトラウスは以下のように述べている。

「痛みを感じると、感じた人のなかですべてが動き出す。世界がその人のなかに侵入してきて、圧倒しようとする。痛みを感じるということは、世界への關係において（in der Beziehung zur Welt）妨害を経験することを意味する。痛みを感じるということはそれゆえ同時に、自己を感じることである。つまり、世界への關係において自己を感じることを意味している。より詳しくいえば、世界との身体的コミュニケーションにおいて自己が変化したことを見出すことにほかならない。」（Strauss 1978：18; 強調は引用者）

シュトラウスはここで、痛みの経験が世界との關係において妨害を経験することである点を強調している。もしこの点に注目するなら、痛みは感覚のスペクトルの一メンバーであるとしても、その特徴は、他の感覚と単純に並列させることができるわけではないことを意味していることになるだろう。痛み以外のさまざまな感覚は世界との關係を可能にし、わたし

たちにさまざまな知覚的世界を開示してくれる。それに対して、痛みの感覚の機能は、世界との関係を妨害し、世界へのアクセスをむしろ閉ざしてしまう傾向をもつからである。にもかかわらず、このような痛みの特徴づけはまだ抽象的すぎるだろう。というのも、世界との妨害された関係もまた、シュトラウスが述べているように、あくまで世界との関係のなかで生じるものであり、その世界との関係の多様性に応じて妨害されたあり方も多様だからである。実際、痛みの経験は、しばしば素朴に考えられるようには物理的障害と単純には対応していないことが多い。

たとえば、慢性痛に苦しんでいる患者は、傷が癒えて、もはや特定の物理的障害に苦しめられているわけではないにもかかわらず、痛みを感じ続けている。こうした事例では、痛みの経験は現在の状況との関係によって生じているのではなくとも、過去の状況との関係によって構成されていることがある。さらには、戦場の兵士は、ひどいけがを負った場合でも、痛みを感じない場合があるといわれる。あるいはまた、転んでけがをした小さな子供は、母親がやさしく傷に触れると泣きやむことがある。こうした多様な事例が示唆しているように、痛みを感じるのか、それとも痛みを感じないのかは、単純に物理的条件によって決定されるのではなく、主体が世界ならびに世界のなかの対象とどのような関係を結んでいるかに依存しているのであり、実に多くの要因によって構成されているのである。

以上のように考えられるなら、痛みの経験を単純な知覚経験の一種のように性格づけることはできない。ここで問題になる世界は、知覚世界のみならず、過去の世界や、さまざまな人間的意味を含む世界だからである。したがって、痛みの経験を情報の直接的ピックアップとして位置づけるだけでは不十分である。しかしだからといって、痛みの体験は世界と切り離された主体の身体のみに関わるわけではない。むしろ、ここでは、現象学の観点を利用して、世界に関する生態学的理解を拡大する必要があるだろう。そしてまさにこのように拡大された世界の概念こそが、わたしたち人間がそのなかで生きている世界であり、そのなかで痛みを感じている世界なのである。

以上のような点を確認することは、決して、科学的知見から離れることを意味するわけではない。むしろ、痛みに関する科学的研究者がすでに以前から認めていることでもある。

「痛みは、複雑な知覚的、情動的経験であり、以下のような多様な要因によって決定されている。すなわち、個人の過去の歴史、害をもたらす人物や状況が当人にとってもつ意味、そのときの「心の状態」、そしてまた、物理的刺激によって引き起こされた感覚神経の反応などである。」(Melzack 1987: 574)



痛み経験のような場合でさえ、シュトラウスが強調しているように、主体と世界との多次元的な相互作用のあり方を示すのであり、経験の「なにを」と「いかに」の二つの側面は不可分な仕方に関係しているのである。

## 2 部分的等価性 (partial equivalence)

ここまで、知覚経験においては、「なにを」という側面と「いかに」という側面とが切り離しがたく結びついていることを繰り返し確認してきた。もしこの二重側面的性格を一貫して保持しようとするなら、知覚経験に関する記述は、最初に思われたほど単純ではないことを認めねばならないだろう。

一方では、すでに繰り返し確認してきたように、もしそれぞれの感覚で、「なにを」という側面が「いかに」という側面によって大きく影響を受けるとするなら、知覚経験に関して、「同じ対象を異なった様相で経験する」とは簡単にはいえないことになる。少なくとも、いくつかの場合には、見られた火と触られた火は異なったものだという方がふさわしいということになる。対象を特定する情報は、対象が現れる仕方のなかにいわば具現しており、そのために、ある様相の現れ方のなかに現れている具体的な情報（火という情報）は、他の様相のなかで現れている情報（火という情報）と単純には同一視できないことになる。

他方で、こうした事情があるにもかかわらず、本論文の最初に述べたように、わたしたちは「異なった感覚様相を通して同じ対象を知覚的に経験している」、と表現することはごく自明なようにも思われる。ギブソンもこのような語り方に賛成しているように思われる。ギブソンは、以下のように述べている。「もし火の知覚が、たんに情報をピックアップすることならば、どのシステムが活性化しても、自覚される感覚作用は同じではないが、知覚は同じとなる」（ギブソン 2011：64）。このように、ギブソンは異なった種類の知覚システムを「等価」と見なしている。少なくとも「部分的には等価」と見なしている。ギブソンによると、システムのあいだで違いがあるとしても、その違いは、視覚ではもっとも詳細な情報が提供されるといったように、それぞれの様相でピックアップされた情報の詳しさの程度の違いにすぎないからである。

ギブソンは、このように感覚を知覚システムとして捉え、そこから主観的な感覚作用を一貫して排除することによって、対象の同一性を強調している。それに対して、知覚と感覚を峻別することをせずに、感覚を知覚の一側面と見なす生態学的現象学の観点からすると、対象の同一性に関して、より複雑なあり方をするものとして記述する必要があることになるだろう。

たとえば、わたしたちが火を見ている場合、火は色、形、それらの変動の仕方などをとも

なって現れている。しかも、この場合の色は、色一般として現れているのではなく、火が現れる場合に示す特定の色のある方をともなって現れている。現象学者のD・カツによって導入された概念を用いるなら、火の色の現れ方のモードは、光輝色（luminous color）というあり方を示しており、それは、表面色（surface color）や面色（film color）、あるいは空間色（volume color）などの色のあり方とは明らかに違った現れ方を示している（Katz 1935）。火という情報は色の特定の現れ方のなかに具現しているということもできる。この意味で、火の赤色（光輝色）は消防車の赤色（表面色）と単純には同一視できない。光輝色と表面色との違いは、日常生活の場面では、時に決定的に重要な意味をもつことがある。色そのものが多次元的あり方をしているのである。

このカツの試みは、生態学的現象学の観点からなされた重要な成果のひとつと見なすことができる。ただし残念ながら、その試みは色の場合に限られており、それに加えて、触覚に関しての限定的な成果が残されているにとどまっている。この意味で、カツに見られるような見方を他の感覚様相の場合にも拡大することができるかどうかはいまだ不明である。しかしその可能性は排除されているわけではないだろう。

ギブソンのアプローチ自身も、こうした方向へと解釈する可能性が残されているように思われる。ギブソンは次のように述べている。

「本理論では、知覚の問題は、感覚作用がどう連合するかではなく、火を特定する音、  
におい、暖かさ、光を、火を特定しないほかのすべての音、におい、暖かさ、光からど  
のように区別するかである。」（ギブソン 2011：64）

もしここでギブソンが述べていることを真剣に受け取るなら、ギブソンは、ちょうど火の色のモード、つまり光輝色というモードが表面色など色の他の現れ方のモードから区別されるように、火の音のモードはほかの種類の対象の音が示すモードから区別されうる可能性を認めていると解釈できるだろう。このことが意味するのは、ギブソン自身が、すべての感覚様相において、火に対応する現れ方の一定のモードが存在することを認めているということである。つまり、色のみではなく、音、におい、そして暖かさ、なども多次元的なものと思なされねばならないというわけである。ギブソン自身はこれらの現象の多次元的特徴を情報の領域に見出そうとしているが、しかし、ここで含意されている課題は、生態学的現象学の見方によって示唆されていることと違いはないはずである。

いずれにしても、もしわたしたちが各々の感覚様相において火に対応する現れ方のような特定の現れ方を見出すことができるとするなら、異なった感覚様相を横断して対象の同一性

を理解可能にする要因は、それぞれの感覚的現れ方に備わる多次元性だ、ということになる。知覚経験の「なにを」の側面が「いかに」の側面と切り離しがたく結びついている以上、異なった感覚様相を横断して経験される同一性は決して完全なものではないだろう。現れ方と切り離された対象の同一性といった考え方は、知覚経験に即する限り認めるわけにはいかなからである。この意味で、知覚経験の対象の同一性は、経験の外部で前提されたり、決定されたりするものではなく、経験の内部でその現れ方に即して「構成」されるものと見なされねばならない。そして、パラドキシカルに聞こえるかもしれないが、まさに、対象の現れ方という知覚経験に内属する多次元性という特質によって、対象の同一性は、現れ方とは独立の（たとえば、概念的）次元に求める必要はなく、内的にとらえる可能性が生まれるのである。こうした事情すべてを考慮に入れたうえでのことであれば、ギブソンとともに、知覚はどの様相のもとで実現する場合であれ、部分的には等価だ、ということができよう。見られる火、聞かれる火、触られる火は、感覚様相の違いに応じてそれぞれ違ったものといいたくなるほど異なった現れ方を示すと同時に、他方では、それぞれが火の色、火の音、火の感じという特有な現れ方のモードをもつことによって、同じ種類の対象の現れ方であることを示すからである。

## 暫定的結論

最後に、本論から導かれる重要な帰結のひとつを確認するために、デカルトの考え方を取り上げることにしたい。

身体なしの心という見方の創始者として知られているデカルトは、感覚経験について述べた箇所では心と身体の「合一」を示唆する興味深い文章を残している。以下で示す長い引用文は、デカルトの『省察』のなかの有名な箇所のひとつである。

「また自然は、これらの苦痛や飢えや渇きなどの感覚によって、わたしは水夫が舟に乗っているような具合に、わたしの身体にただ乗っているだけではなく、身体ときわめて緊密に結ばれ、いわば混合されており、したがって身体とある一なるものを構成している、ということをも教えている。なぜなら、さもないと身体が傷ついていても、考えるものにほかならないわたしは、そのために痛みを感覚することはないであろうし、ちょうど水夫が、舟のどこかがこわれているときに視覚でそれを知覚するように、わたしはその傷を純粹知性で認識する〔だけ〕であろうからである。また身体が飲食物を必要としているときでも、わたしはそのこと自体を知性で明瞭に理解しても、飢えや渇きの不分明な感覚をもつことはないからである。というのも、たしかに飢え、渇き、痛みなどの

感覚は、精神と身体とが合一し、いわば混合していることから生じる、ある不分明な意識様態にほかならないからである。」(デカルト 2006: 121f. 強調は引用者)

たとえば、わたしが手をやけどした場合、わたしはやけどを、水夫が燃えている船を意識するのと同じように意識するわけではない。どちらの場合も、危機的状況が発生し、生命が危険にさらされている。わたしも水夫もこの事態に同じように対処している。しかし、これらの事態が現れている仕方は根本的に異なっている。水夫の方は危険を、痛みを感じることもなしに知的に理解しているが、わたしのほうは危険を理解しているだけではなく、それを痛みとして感じ取っている。デカルトによると、痛みを感じることは、わたしは「身体ときわめて緊密に結ばれ、いわば混合されており、したがって身体とある一なるものを構成している」ことを示しており、この関係は「純粹知性」の領域では理解不可能であることを示しているのである。

このような大変印象深い比喩を用いた論述において、デカルトは、純粹な知性による傷の理解を、傷の痛みを感じることに対応させるのではなく、船の壊れた箇所を視覚的に知覚することに対応させている。しかも、このことをあたかも自明なごとくに述べている。しかし、なぜ視覚的知覚は純粹な知的理解に類似していると見なされ、痛みを感じることから決定的に区別されるものと見なされるのだろうか。本論で見てきたことが正しいとすれば、視覚的知覚と痛みの感覚は二つの異なった身体的な世界内存在のあり方を示すものと見なしうるものであり、この意味で、感覚のスペクトルに属する共通のメンバーと見なしうるはずである。たとえ両者は、このスペクトルのなかで非常に違った位置を占めるものであるにしても、である。デカルトの比喩は、視覚と痛みとのあいだの相違にのみ焦点を合わせ、(身体的世界内存在の様態であるという) 両者の共通の側面を見えなくさせている。このような戦略的な比喩の使い方によって、デカルトは感覚様相の違いを「存在論化」し、純粹な知性として働く身体抜き心とさまざまな感覚を享受する身体化された心との区別を確立することに成功した、といえるだろう。

本論で試みてきたことは、デカルトがまるで自明なことのように見なしている感覚様相の違いの存在論化を批判し、視覚からはじまってさまざまな感覚様相を通して痛みに至るまで、感覚のスペクトルに属するすべての知覚経験に備わる「いかに」の次元に光を当て、感覚に表現されている身体的な世界内存在の次元を回復することにはほかならないのである。

## 引用・参考文献：

（翻訳書からの引用に当たっては、文脈などを考慮して適宜、修正して用いた。翻訳者の方々のご理解をお願いする次第です。）

- アリストテレス. (2014). 『魂について』 中畑正志訳、アリストテレス全集 7 巻、岩波書店
- Burnyeat, M. F. (1995). "How much happens when Aristotle sees red and hears middle C?—Remarks on *De Anima* 2, 7-8," in *Essays on Aristotle's De Anima*, eds. by M. Nussbaum and A. O. Rorty, Clarendon Press.
- デネット、ダニエル・C. (1998). 『解明される意識』 山口泰司訳、青土社
- デカルト、ルネ. (2006). 『省察』 山田弘明訳、ちくま学芸文庫、筑摩書房
- ギブソン、J. J. (1985). 『生態学的視覚論、ヒトの知覚世界を探る』 古崎敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬旻訳、サイエンス社
- ギブソン、J. J. (2011). 『生態学的知覚システム、感性をとらえ直す』 佐々木正人・古山宣洋・三嶋博之（監訳）、東京大学出版会
- Grice, H. P. (1962/2011). "Some Remarks About the Senses," in *The Senses: Classical and Contemporary Philosophical Perspectives*, ed. by F. Macpherson, Oxford University Press, 2011.
- Katz, D. (1935). *The World of Colour*, translated by R. B. MacLeod and C. W. Fox, Kegan Paul.
- Macpherson, F. (2011). "Individuating the Senses," in *The Senses: Classical and Contemporary Philosophical Perspectives*, ed. by F. Macpherson, Oxford University Press.
- Melzack, R. (1987). "Pain," in *The Oxford Companion to the Mind*, ed. by R. L. Gregory, Oxford University Press.
- 村田純一 (2013). 「照明の現象学——メルロ＝ポンティの『眼と精神』における視覚の存在論」『立正大学哲学紀要』、第 8 号
- 村田純一 (2015). 「痛み体験のパラドックス」『東北哲学会年報』、No. 31.
- Strauss, E. (1978). *Vom Sinn der Sinne, Ein Beitrag zur Grundlegung der Psychologie*, zweite Auflage, Reprint, Springer-Verlag.



# What are senses ? : from the viewpoint of an ecological phenomenology

Junichi MURATA

Perceptual experiences not only have cognitive aspects, through which we acquire information about an object, but sensory aspects, through which we experience how the object appears. In the traditional view, the sensory aspects have been reduced to sensations or senses, which have a function of preparing materials for cognition. Against this view, E. Strauss characterized sensing as a kind of “communication” with the world in a pathetic dimension and each sense modality as a way of embodied “Being in the world” in its own way. My paper tries to combine this phenomenological view of senses with the ecological approach of J. J. Gibson, according to which senses are considered as perceptual systems. Through this attempt of an *ecological phenomenology*, the paper focuses on the embodiment dimension of perceptual experiences and clarifies the multi-dimensional and multi-sensory character of various perceptual experiences.